

## みなとの魅力 —人、モノ、情報の融合—

The appeal of ports and harbors  
—People, goods, and information in harmony—

特集担当主査：稲田 憲武

特集企画担当：坂井 啓一、田中 尚人、西園 勝秀、瀧本 果奈、石田 貴志

四方を海に囲まれているわが国では、古くは遣隋使、遣唐使の時代から海運が栄え、「津々浦々」という言葉が示す通り、全国各地に港が形成されてきた。その後、各地の港を結ぶ国内航路の開拓とあわせて、海運は、江戸時代の菱垣廻船、樽廻船、北前船に代表されるように国内における物資の輸送の大きな役割を担うこととなった。ただ、鎖国政策の影響により大型船の建造が禁止されていたため、当時の港には大型船の係留に必要な棧橋などの近代的な港湾施設は整備されていなかった。

明治時代になると、鎖国の解除に伴い横浜港、神戸港などで欧米の大型蒸気船が係船できる施設が続々と整備された。その結果、港にはそれまでとは比較にならないほどの人、モノ、情報が集積されるようになり、その姿と役割は大きく変貌することとなった。

さらに、第二次世界大戦後、世界的な石油輸送の需要増大に伴う船舶の大型化に対応するため港湾整備の近代化が進んだ。特に、高度経済成長期には、港湾政策は産業政策と深く結びつき、臨海工業地帯の形成を推進

するとともに、国際物流の革命ともいべき海上輸送のコンテナ化による貿易量の増大にアジアでいち早く対応するなど、港は内外のさまざまな変化に柔軟に対応し、現在までわが国の経済発展を支えてきている。

一方で、港は古くから人々が集う憩いの場としての機能も有している。現在は、クルーズ船などインバウンドの急増を契機として、市民と港との垣根を下げ、港を人々の交流拠点として生まれ変わるための取り組みが各地で進められている。

本特集では、以上の状況を踏まえ、読者に、港湾を身近に感じていただくために、「みなと」の理解（知っていただく）、魅力（行きたくなる）、将来（希望を持てる）という三つの観点から、話題を提供する。

最初の観点、「みなと」の理解を深めていただくため、日本の代表的な存在であり、一昨年150周年を迎えた神戸港を紹介する。「みなと」は美しい景観を兼ね備えた魅力的な空間であることを感じていただきたいと考える。

次に、2019年6月まで土木学会会長を務められ、交通政策審議会港湾



写真1 みなとの変遷(横浜港大さん橋 上:明治時代(出展:長崎大学附属図書館)、下:近況(出展:日本港湾協会)

分科会の分科会長として港湾に関する見識の深い小林名誉教授に、わが国の港湾の中期政策「PORT 2030」およびグローバル時代における港湾政策について紹介していただく。黒田名誉教授には、「グローバル・サプライ・チェーンの盛衰と

日本の港湾」と題して、歴史的な視点より世界的な物流ネットワークの変

遷およびその中で日本の港湾の位置づけについて紹介いただく。続いて、港湾の役割、仕組みを理解していただくため、国土交通省港湾局より「わが国港湾に求められる役割と将来像」について紹介していた

だいた後、「港湾の構造・機能」、「港湾の役割」に関する記事を紹介する。特に、「港湾の構造・機能」では、海

にある構造物の特徴(陸上構造物との違い)を感じていただきたいと考える。さらに、実例として、横浜港の役割についても紹介する。

から、魅力ある「みなと」について意見をいただき、魅力ある「みなと」の

実現に向けた課題、今後の取り組みなどを語っていただく。

3番目の観点、「みなと」の将来については、「港湾の現状」、「港湾の将来に向けた取り組み」にわけて紹介する。

港湾の現状については、外航、内航それぞれの視点から、港湾業務に携わるユーザーの立場で見た現状についての記事を紹介する。

また、港湾の将来に向けた取り組みについても2例紹介する。1例目は、みなとまちづくりの事例として、長崎港の変遷(出島から長崎開港等を含む)と水辺の森公園等賑わい形成する取り組みを紹介する。2例目は、港湾の技術基準の海外展開について紹介する。

土木工学を専攻してきた方の中で、港湾工学を学生時代に勉強した方、あるいは港湾業務に携わった方はそれほど多くないと思われる。本特集を読んだ方々、特に学生の皆さんが「みなと」に興味を持ち、「みなとを見に行こう」、「より詳しく勉強しよう」、「将来、みなとに関わる仕事をしたい」と思っただけであれば幸いです。